

「だい、じよぶ……です……っん” うッ♡」

ひくん、ひくんと大きな収縮を繰り返す内壁を、凶たく熱い鳩男のものが変わらぬ速さで行き来する。

快感に意識が飛びそうになりながら返事をするので、自分がちゃんと喋れているのか、だんだんわからなくなってくる。

「ひい…ッ♡」

鳩男の雄茎が奥深く突き立てられ、限界まで怒張したそれが突然<sup>はじ</sup>弾ける。

火傷<sup>やけど</sup>しそうに熱い粘性の液をドブドブと注がれ、下半身がおののくように痙攣した。拍子に、白蜜を吐き出したばかりの尿道口に急な失禁感がこみあげて、

「あ♡、あ♡、ああッ！♡いやあ…っ…！♡」

だめ、と思う間もなく、幼茎の先端からじよるじよると透明な液体が溢れてくる。

「ひ…♡あ……っ♡止まっ……止まって……え……っ！♡」

心の中だけで言っているはずが、口から出ている。

混濁した意識の中でも、先生の視線だけは感じ取れて、羞恥に気が狂いそうだ。

しかも恥ずかしさに追い打ちをかけるように、

「ひいひいッ♡んう…ッッ！♡♡いやあ…ッ！♡♡」

ざわッと身に覚えのある熱さが胸の奥から湧きおこり、

びゅううう——ッッ！♡♡

放尿の勢いにも負けじと、左右の胸から噴水のように二本の白い滝が放射される。

「ああああッッッ！♡♡♡」

上半身と下半身とから盛大に液体を放出しながら、壮絶な解放感と淫楽とに全身を震わせる。竿から噴き出ているのはただの尿だが、触手にさんざんほじくりまわされた場所を熱い尿に通過される刺激は快感そのもので、竿を内側から<sup>や</sup>灼かれる感覚に腰ががくがくのたうった。

「ふむ……。君がさっき言った通りだね。乳首から謎の液体が出るようになった、と……」

そして先生は何を冷静に分析しているのか。

なんだか、まただんだん腹が立ってきた。